

歴史の中の女たち

<第 11 回>

トゥパク・アマルの妻ミカエラ

伊藤 滋子



ミカエラ・バスティダスはアンデス山脈の西斜面にあるアバンカイ地方のタンブルコに生れた。豊かな農地、牧草地があり、リマからクスコへ上る旅人の中継地として栄えた村

である。父はスペイン人、母は先住民のメスティサであったが、ほっそりした体つきで、髪が縮れていたため、父親には黒人の血が混じっていたのではないかとされる。彼女は15才の時、クスコのさらに先にあるティンタ地方の青年、ホセ・ガブリエル・コンドルカンキと結婚した。彼は少年時代、クスコでイエズス会が首長の子弟のためにつくった学校に学び、リマでは中南米最古のサン・マルコス大学の講義を聴講したともされる。幼くして両親を亡くしたが、350頭のラバを有し、ペルー、アルトペルー方面で手広く運搬業を営んでいた。ミカエラに出会ったのもそのような旅のことだった。

彼女は3人の息子に恵まれ、夫は父のあとを継いでトゥングaska、パンパマルカ、スリマナの3村の首長となった。しかしペルー副王領全体を見渡せば、スペイン人の圧政に対する不満は募る一方で、各地でさまざまな反乱が起こっていた。先住民の最大の不満はインディオを強制的に鉱山、織物工場、農園

に割り当てて酷使するミタの制度で、ことにコンドルカンキの村はポトシ銀山へのミタの最北端にあり、現地に行くだけで3ヶ月もかかり、負担は更に大きい。次がレパルティミエントといわれる、商品に法外な値段をつけてインディオに分配してむりやりに買わせるという、コレヒドールがリマの大商人と結託して私腹を肥やすための制度だった。副王の代理人として専横的な権威を持って村に君臨し、村民を虐待するスペイン政府派遣の役人、コレヒドールは常に反乱の直接の標的となる。

1780 年年明け早々、アレキパの町に、食料や雑貨にかかる新しい税の導入や納税者人口の調査に抗議する壁書きが現れた。それが夜、町を呼ばれる大声に変わり、コレヒドールは徴税をしばらく見合わせようとしたが、新参の徴税人はそれを聞き入れず、強行する。すると1月半ば、3000人の群集が税関や倉庫、コレヒドールの家を襲撃し、放火、略奪するという暴動がおきた。他の町からの応援で暴動はまもなく収束したが、ついでそれがクスコにも波及した。やはり抗議の壁書きが町のあちこちに現れ、アレキパや北のキトで起こっていた反乱を賞賛し、砂糖の買占め、税の徴収における不正、織物工場におけるインディオの虐待など、コレヒドールの悪行の数々を暴き立てる言葉が連ねられていた。そんな中、銀細工師を中心とする数人の

クリオリヨがコレヒドールを捕らえ誅罰を与えようと企てたが、仲間の一人が教会での告解でそれを神父に漏らしたため露見し、首謀者数人がクスコの広場で絞首刑に処された。

しかしこれらの動きは同じ年にトゥパク・アマル二世によって引き起こされた反乱に比べれば取るに足らない規模であった。彼の反乱はたった半年しか続かなかったが、インディオの村々や、メスティソ、クリオリヨにまでインカ帝国再来の希望を抱かせ、その呼びかけは北はキト、ヌエバ・グラナダ、南はチャルカス、果てはブエノスアイレスに至るまで及び、全大陸的な広がりを見せた。そしてそれを制圧しようとした王軍もかってない大掛かりな人数の軍を動員し、その規模は後の独立戦争を上回る。そしてこのトゥパク・アマル二世こそ、ミカエラの夫、コンドルカンキであった。彼は 1572 年にクスコで処刑されたトゥパク・アマルの直系の子孫であるとしてトゥパク・アマル二世を名乗り、当時空位であったクスコ近郊のオロペサ公爵領を継承することを主張し、リマの聴訴院にそれを願ひ出たのである。彼はリマのフリー・メイソンの会員であったといわれる。ポリバル、サン・マルティン、ミランダ、オ・ヒギンス、ワシントン、フランクリンなど、南北米大陸の独立に関わった人物のほとんどがこの秘密結社に属しており、彼もそこで革新思想の洗礼を受けたのかもしれない。結局、聴訴院からは所領の継承を却下され、トゥパク・アマルは失意のうちに村に戻った。

それから 3 年後の 1780 年 11 月 4 日、彼はティンタのコレヒドール、アリアガを捕らえ、集まった 3000 人群集の前で、「スペイン王は各種の税とミタの義務の廃止と、コレヒドールの殺害を命じられた」という演説をしたあと、アリアガを処刑した。まだそこには明確なスペイン王に対する反乱の意思は表

明されておらず、スペイン王に代わってコレヒドールに天誅を加えるのだ、と釈明している。血統、雄弁さ、断固たる性格、反逆の趣旨どれをとっても申し分ないこの指導者のもとでなら、強制労働、税、暴力、拷問その他のすべての虐待から逃れられるかもしれない、という望みを抱いたインディオ大衆は盲目的に彼に従い、勢いづいたトゥパク・アマルはさらに近隣の村のコレヒドールを襲った。こうして 1533 年に最後のインカ、アタワルパが処刑されて以来最初の大掛かりな反乱がティンタで始まり、剣と十字架によって抑圧され、奴隷化されていた人々に自由と正義を回復する希望を与えた。多くの村がすぐさま呼応し、反乱軍の数は瞬間に膨れ上がっていった。

コレヒドールが殺害されたという報はスペイン人の牙城クスコの市民を震撼させ、直ちにリマの副王をはじめ、近隣の町々に救援を要請する使者を送ると同時に、防衛を固めようとした。そこへ別の村のコレヒドール、カブレラがトゥパク・アマルの襲撃を恐れてクスコに逃げてきた。そしてクスコ市民を煽りたてて義勇軍を募り、それに応えた 1200 人の若者が彼と共に反乱軍征伐に出発した。それを察知した反乱軍は 11 月 18 日、サンガララ村で待ち伏せて敵を包囲する。この時教会に立てこもったカブレラ軍が持っていた火薬が暴発し、彼を始めとする 600 人近い死者が出た。ほとんど戦わずして勝った反乱軍は敵の負傷者を手当てし、捕虜をクスコへ帰す。

敵の武器を手に入れて翌日トゥングスカへ帰ったトゥパク・アマルは各地に反乱に加わるように誘う手紙を送った。インディオばかりでなく、クリオリヨに対しても、スペイン人と現地政権の横暴を退けるために味方になるように呼びかけ、注意深く教会に敬意を払

うことにも留意したため、この反乱に参加した聖職者も多い。反乱は野火のように地方全体に広がり、一ヶ月後には5万人もの人数に膨れ上がった。それは大きなうねりとなって、副王領全体を飲みこむかに見えたのだが・・・。

トゥングスカ村に残ったミカエラは兵站の一切を引き受け、その働きは内助の功の域をはるかに越え、彼女自身が総司令官であるかのように通行証にサインし、リマとの交通を絶つために橋を落とすようにといった命令書まで出している。だが夫には頻繁に手紙を出し、刻々と状況を伝えた。手紙は彼女が口述し、実際にペンを取ったのは捕虜になったスペイン人数人で、最後に彼女がサインする。その内容は当地の情勢、スパイが集めてきた敵の動き、集まった資金や食料などを報告し、さらには資金や、振舞い用の酒を送ったり、あるいは夫にインカとしての姿勢を堅持するように促し、毒殺や裏切りなどに対する注意を喚起する、実にこまごまとした愛情のこもった手紙であった。しかしそれが短期間のうちに作戦を指示したり、苛立ちと叱責を表す手紙となり、切羽詰った息遣いが聞こえるような手紙に変わっていく。夫がいつまでたってもクスコへ進撃せずぐずぐずしていることで、いかに彼女が苦悩しているか、いかに味方が窮地に陥っているかを訴え続け、そして最後には絶望してしまうのだ。

「もう待てません。私が自分で突撃したいくらいです。この重要なことがわからないなら、皆が敵に囲まれて、子供たちやわれわれすべてに危険が及ぶことになります」「あなたは私を苦しめます。村々を巡り歩くのに2日も費やしているものだから、兵士たちは退屈して自分の村へ帰ってしまうのですよ」「何もすることのない村で過ごして時間を無駄にしないで。そんなことをしていたら、食べ物

が尽きてしまい、兵士たちは去り、時を逸することになります。あとにはわれわれだけを取り残され、自らの命でその代償を払わなくてはなりません。かれらは利益だけで動き、平気でわれわれの目を刳り貫くのですから。去っていくものたちは腑抜けですから、罪に問われることを恐れてそうするので。私が苦勞して集めた兵を失い、反対にクスコのスペイン人はリマの応援を得ることになるでしょう。もう数日前に向こうを出発しているのですから」

「あなたは日夜作戦を練っているものと信じていました。私たちの身を滅ぼさせるようなことはなさないでください」「あまりにも胸が痛むものですから申し上げるのです。でももしあなたがわれわれの敗北をお望みなら、どうぞ気の済むまでお休みください」「まったくヤウリの村を一人でほっつき歩いて塔にまで登るだなんて。少しは身分をわきまえて恥ずかしくない行動を取ってください」「すぐにクスコへ向かうようにあれだけ申し上げたのに、あなたは無視して、敵に時間を与えてしまわれた。敵はピッチョの丘に大砲を据えたり、さまざまな措置をとったので、もう攻め入ることは不可能です。神が未永くあなたをお守りくださいますように。トゥングスカにて 1780 年 12 月 6 日」「キスピカチのインディオは守りにつくことに疲れ果ててしまったことをお知らせします。神は私に、犯した罪の罰を受けることをお望みになられたのでしょうか」「パルコの者たちがすでにアコスに迫っていると味方のものが知らせてきました。わたしは命を落とすことになるのは分かっていますが、そちらへ向かいます」

ミカエラの危惧はすべてそのまま現実となった。もしトゥパク・アマルが妻の言葉に耳を傾けて、まだクスコがサンガララの敗戦

に動揺し、混乱にあるうちに攻撃していれば、違った結果が生じていたかもしれない。だが、トゥパク・アマルが反乱を広範囲に広げようと村々を回っている間に、落ち着きを取り戻して体勢をたてなおしたクスコでは税の軽減やミタの廃止などの甘言で近隣の村から金や物資を調達し、高い給料で人を集めて訓練を施し、町の周辺や教会の屋根に大砲を据えつけ、着々と守りを固めていった。年が明けた1月2日、ようやくトゥパク・アマルがクスコを見下ろす丘に姿を現した時には、もはやそこは難攻不落となっていた。しかも前線にはインディオが配置されており、インディオ同士の戦いになることを恐れた彼は降伏を呼びかけたが無視され、一戦も交えず1月10日撤退した。彼の軍には敵から分捕ったわずかな火器しかなく、それも扱いに慣れている者がいない。スペイン人捕虜に大砲を打たせたところで、まともに命中させるわけがなかった。一旦退くと、3万といわれた軍は離反者が相次ぎ、反乱軍は急速に勢力を失って行く。反対にリマの副王が派遣した巡察官アレチェの到着で勢いづいたクスコ軍は、3月には大々的な反乱征伐の軍を出動させ、4月6日、トゥパク・アマルは家族や仲間と共に捕えられた。ミカエラが予言した通り、命を助かりたい味方の裏切りによるものであった。

ミカエラはリマから来た役人の厳しい訊問を受けたが、始めから死を覚悟した彼女の答えは潔い。年齢を聞かれて「25才」（実は36才）、生まれた場所は「パンパマルカ」（今住んでいる村）、数々の命令書を書いたではないか、と問われると「私は文盲です」（残されている彼女の署名はとても文盲には見えない）と、質問をはぐらかし、訊問書にも署名しない。賢い彼女は同じ質問を繰り返されても相手の罠には落ちず、仲間の名を聞かれ

ると敵に寝返った者の名を挙げたりして、とうとう夫以外の味方の名は一人たりとも漏らさなかった。

5月18日、クスコの広場に集まった群衆の前で見せしめの処刑が始まった。巡察官アレチェが考えたその方法はこの上なく残酷で血なまぐさいものであった。彼女と夫はまず、仲間や親戚、長男イポリトが順番に絞首刑にされるのを見せつけられた。ミカエラが獣のような声をあげたのは長男の処刑の時一度きりであった。彼女は処刑の前に舌を抜かれようとしたが、唇を切られながらも抵抗し、諦めた刑吏は彼女を椅子に座らせ、縄で首を絞めた。だが彼女はどうしても息絶えず、最後には足で踏みつけ、蹴られて死んだ。トゥパク・アマルは舌を抜かれたあと、4頭の馬に四肢を引かせる四裂の刑に処された。だが彼の強靱な肉体は宙に浮いても、切り離されはしない。業を煮やしたアレチェは最後は斬首を命じた。ペルーの独立が実現したのはそれから35年後のことであった。

家族の幸せを犠牲にして、当時の女性の概念をはるかに超えた行動力で民族の解放に殉じたミカエラは、ペルーのみならず女性解放のシンボルとして取り上げられることが多い。さらなる歴史的背景を知るには網野徹哉氏著『インカとスペイン：帝国の交錯』（講談社）をお勧めしたい。

（いとう・しげこ）

